



未知しるべ

宇野 賀津子

インフルエンザが猛威をふるっている。予防策はワクチンだが、今からでは遅い。この感染症はなかなかやっかいである。なにしろ、空気感染するのだからせきようがない。せいぜい人のたききん集まるころへ行くのを避けるしかない。あとは十分な休養をとり、手洗いやうがい

を励行することだ。 どうして十分な休養をとり、手洗いやうがいを励行することがインフルエンザから身を守るすべなのだろうか。 実は私たちの感染防御の第一のバリアは皮膚や粘膜なのである。風邪をひくと、ど

がはれる、せきがでる、鼻水がでる、これらはどの粘

膜、肺表面、鼻の粘膜で風邪のウイルスと生体が闘っている証拠なのである。 この最前線のバリアを越えた病原菌は第二のバリアであるリンパ液や血液などのなかにある抗菌性の物質である程度殺される。 第三のバリアは白血球といわれる細胞の集団で、数時間以内に感染のおこった部位へまず好中球がやってくる。これは殺菌する能力や食菌能力の高い細胞である。さらに数時間から十数時間後にはマクロファージと呼ばれる集団がやってくる。これも食菌作用が強い。またナチュラルキラー細胞もやってくる、感染細胞の排除にかかる。生

インフルエンザ

四段階のバリアが守る

にとつて異物である細菌やウイルスに対して、相手かまわずやっつけにかかる。この段階を非特異的免疫機構あるいは初期免疫という。 この段階でこれらの細胞はインターロイキンやインターフェロンをはじめとしたいろいろな液性の物質を放出する。これは次の段階の免疫機能を呼び起こし、力づけるのに大きな役割を果たす。このころ、身体はだるく、熱が出るということになる。熱の原因もこれらの液性物質のなせ

るわざなのである。そしてこれら初期感染防御系ではやっつけきれなかったタフな病原体に対しては、T細胞、B細胞が中心となった、第四のバリアである特異的免疫機構が作動する。そしてインフルエンザと闘うスペシャリスト、つまり特異的抗体やキラー細胞がつくられ、ウイルスは体の中から除去されて病気は治る。この過程には約一週間の期間が必要である。この際、一部のT細胞はこの病気にかかったことを少なくとも数年は記憶している。次に同じ病原体が来たときには、より早くこの特異的免疫機構がたちあがって、二度目は軽く済むということになる。ワクチンが有効なのは

このことによる。ただしウイルスの型が違っていれば、全く役に立たない。 このように私たちの身体は、病気に対して何段階かのバリアで守られている。人によりそれぞれの能力に高低はあるが、これらの能力の強化こそ、外界からの侵入者に対する対抗手段なのである。 インフルエンザによるお年寄りの死亡が報じられている。いろいろな人の免疫機能をはかるのが私の仕事のひとつであるが、血を少しとって試験管のなかでウイルス感染の状態を作りその時に生み出されるインターフェロンを測定する検査をしたら、がんの人、C型肝炎の人、HIV感染者も、生体防御力の低下した人には命取りとなる。そして多くの人の直接の死因は

感染症なのである。 (ルイ・パストゥール医学研究センター研究室長)

このことからおのずと、これらの患者さんと接するときの注意点がわかっていただけである。元気な人なら少し熱が出て治ってしまうインフルエンザも、生体防御力の低下した人には命取りとなる。そして多くの人の直接の死因は感染症なのである。